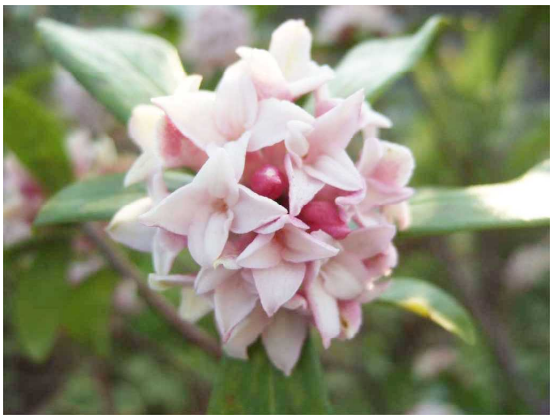
『今 月 の 天 候 と 農 作 業』

通巻第５５４１号
３　月 号
平成２４年３月２日発行
宮　　崎　　県
宮 崎 地 方 気 象 台



【　九州南部１か月予報　】
向こう １ か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【　確　　率（%）】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	50	30	20

【　概　　要　】
　天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。**期間の前半は気温の変動が大きい見込みです。**
向こう１か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに４０％です。降水量は、多い確率５０％です。日照時間は、少ない確率５０％です。
〈1 週目の予報〉　３月　３日（土）～　３月　９日（金）
　天気は、気圧の谷や湿った気流の影響で曇りや雨となるでしょう。期間の前半に荒れた天気となる日があるでしょう。（詳しくは週間天気予報をご利用ください。）気温は、高い確率８０％です。
〈2 週目の予報〉　３月１０日（土）～　３月１６日（金）
天気は、九州南部では数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または低い確率ともに４０％です。
〈3 週目から 4 週目の予報〉　３月１７日（土）～　３月３０日（金）
天気は、数日の周期で変わるでしょう。
気温は、平年並または低い確率ともに４０％です。

普通作物

◆早期水稲

この時期は天候が急変し、高温や低温及び強風による被害が毎年見られます。気象情報に注意し、育苗時の温度管理や田植え後の水管理を徹底しましょう。

1　育苗管理

緑化期間は、高温による苗の徒長や急激な乾燥による葉焼け、しおれの発生、急激な低温によるムレ苗や立枯れの発生が心配されます。そのため温度管理を最高で２５度、最低で１５度とし、かん水は午前中に終え、多湿とならないようにします。

硬化期間に入り１０度以下の低温や２５度以上の高温に遭うと、立枯れやムレ苗、苗いもち等が発生しますので注意し、田植え７日前頃から外気に慣らします。

2　水田の漏水対策

肥料や除草剤等の排水路への流出防止、水温や地温の上昇、除草剤効果の向上及び節水を図るため、畔の補修や畔塗り、排水口の点検を行います。

3　移植

３月中旬から田植えが本格的に始まります。

植え付け後の低温と強風の影響により、活着の遅れや葉枯れが心配されます。また、重度の場合は枯死に至り、植え直しとなる場合もありますので、田植え前後に寒波が予想される場合は、無理に移植せず日延べしましょう。なお、既に移植している場合は、深水にして苗を保護しましょう。

4　基肥の施用

基肥の施肥には、一般的な全面全層施肥や省力的な側条施肥、基肥一発施肥等があり、それぞれ肥料の種類や施肥方法、施肥量が異なるので注意しましょう。

5　箱施薬

移植後気温が高くなるにつれ、いもち病が発生しやすくなりますので、予防を兼ねて必ず移植時に箱施薬を行いましょう。薬剤が苗に付着したら葉焼けすることがありますので払い落としましょう。

◆麦類

1　排水対策

今後出穂を迎えますが収穫までの間には、一時的な多雨や長雨により湿害が発生することもありますので、排水対策を実施していないほ場では、排水溝を設けるなど排水対策を実施し、降雨に備えましょう。

2　土寄せ

生育が旺盛で倒伏の恐れのある場合は、条播栽培に限り３月下旬までに土寄せを行います。

3　赤かび病の防除

開花期に雨が多いと「赤かび病」が発生します。
出穂を確認したら農薬使用基準を守って小麦では穂揃い期頃に、大麦では穂揃い期から７～１０日後（葯殻抽出期）に防除を行います。

（鎌田　博人）

施設野菜

◆共通事項

３月に入ると、日増しに日射量が増え気温も高くなり、作物の蒸散量が多くなりますので、かん水量を増やします。また、日中は内カーテンや遮光資材を利用した日射量調節を行うとともに、十分な換気を行いハウス内の温度が高くならないように注意します。

夜間も気温が高い場合には内カーテンは開放し、ハウス内の適温管理に努めるとともに、加温機や循環扇によって、送風を行い湿度低下に努めます。

◆きゅうり

強い日差しにより葉温が上がり、蒸散量も多くなるため、葉の老化が早まり草勢低下につながりますので、午前中は内張ビニルを利用し、強光線防止と湿度確保を行います。また、ハウス内温度が３２度を超えると果色が淡くなり、果形も乱れやすくなるため、十分な換気に努めます。

◆ピーマン

気温の上昇とともに、腐敗果や赤果の発生が懸念されます。消費地に高品質な商品を届けるために以下の対策を徹底します。

①剪定した枝、葉等はハウス外に持ち出し、ハウス内を清潔に保つ。

②日中の高温時はハウスの換気に努め、ハウス内を高温多湿にしない。

③よく切れるハサミを使用し、成り口が早く乾くようにする。

④収穫に使用するハサミ、手袋、コンテナ、選別台は、良く洗い、清潔にして使用する。

⑤３～４日間隔で収穫を行う。

また、白果の発生も多くなりますので、混み合っている枝を整理し、光線が中まで入るように整枝・剪定を行いましょう。

◆トマト

ミニトマトは気温上昇にともない、裂果が多くなるので、かん水量に注意します。土壌水分の急激な変化がないよう、少量多回数のかん水を行います。また、空中湿度を下げるため日中の換気を徹底し、一日おきに収穫を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果の発生が多くなるのでかん水量を多くします。また、草勢が低下すると小玉果が発生しますので追肥が遅れないように注意します。

◆いちご

温度はできるだけ生育適温に近づけ、低温管理をこころがけます。ハダニ類が平年に比べ多く発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行いましょう。

（郡司　孝幸）

葉茎根菜類・いも類

春夏野菜の播種期になります。直まきではほうれんそう、小松菜、ごぼうなど、育苗が必要なものでは、キャベツ、

深ねぎなどがあります。作付計画を立てて適期に播種します。また、トンネル栽培では日中の気温が高くなるため換気作業を徹底しましょう。

◆スイートコーン

大型、小型トンネル栽培は間引きの時期となります。本葉４～５枚の頃に健全で揃ったものを１株に整理しましょう。今年はマルチ被覆前に降雨が少なかったことから、マルチ内の乾燥が予想されますので生育促進を図るため、畦間や株元へのかん水を行ってください。

また、ハウス栽培や大型トンネル栽培で、雄穂抽出期を迎えるものについては、雄穂が出始めたら窒素成分で５～６㌔を追肥しましょう。

◆らっきょう

上旬は追肥の時期となります。球の肥大と生育促進のため窒素成分で２～３㌔程度を遅れないように施用しましょう。また、球の緑化を防止するため併せて土寄せを行いましょう。

◆さといも

マルチ栽培は早生種の植付け時期です。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋（３０～５０㌘程度）を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

◆食用かんしょ

トンネル栽培では換気作業を徹底します。苗床については温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎ、健苗の育成に努めます。

◆ばれいしょ

品種や種芋の月齢によって違いますが、芽数が多いと着生する芋数が多くなり、芋が小さくなりますので、芽が出てきたら早めに１株１～２本に整理しましょう。

◆しょうが

４月に植付け予定の普通栽培では、欠株をなくし生育を

揃えるための催芽の時期となります。催芽は２０日間程度行います。幅１２０㌢、深さ１５㌢の溝を作り、種しょうがを２段重ねして並べ、吸水させたワラで覆い、約１０㌢の厚さに土をかけ、その上をビニルで覆います。なお、催芽は１㌢以内とします。

（河野健次郎）

果樹

１　常緑果樹

◆かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用しましょう。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが効果的です。

昨年は着果量が少なかったことから、今年は着花数が多いことが予想されます。養分競合による花質の低下を防ぐために、新梢発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。花の子房が充実し、生理落果を軽減する効果があります。

◆完熟きんかん

収穫が終了したら、縮間伐・剪定の時期です。枝が隣接樹に当たりだしたら縮間伐を行いましょう。剪定は、樹勢や樹齢を考慮し、主枝、亜主枝の配置を考えながら、樹冠内部まで日が当たるようにしましょう。剪定の遅れは、枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くします。剪定は４月上旬までには終わらせましょう。

また、礼肥やたい肥、石灰資材を施用し、新梢を発生させる時期を目安に、たっぷりとかん水を行いましょう。

◆日向夏

３月に入ると露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生日向夏から収穫を開始し、在来日向夏は減酸を確認してから収穫しましょう。また、今冬は１２月から２月にかけて、数回の低温が観測されました。収穫前にはすあがりの有無を確認し、出荷果実に混入しないように心がけましょう。

◆マンゴー

幼果期から果実肥大期には、薬害が発生しやすくなります。薬剤散布は、晴天日の午前中の、薬液が速やかに乾く環境下で行いましょう。また、果実の赤色の部分を増やすために、果実のつり直しを行い、緑色の側にも光を当てるようにしましょう。

３月になると、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。内カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止しましょう。

２　落葉果樹

◆桃

桃には非常に多くの花芽が着きます。良好な果実肥大のために、摘蕾を行いましょう。花芽が丸くふくらみ、赤みを帯びた頃に、横からやや下向きの蕾を残します。このとき、３０㌢以上の長果枝は中央部に６～７個、中果枝は３～４個、２０㌢以下の短果枝は先端部に２～３個の花芽を残しましょう。

◆梅

開花期～展葉期にかけて病害虫が一斉に発生します。予防や初期防除を実施しましょう。

（山口和典）

花き

◆電照ギク

３月になると日長が長くなりますので、花芽をスムーズに分化・発達させるために上旬からシェードを実施します。シェード時間は１８時から７時まで暗黒とした１１時間日長とします。一晩中シェードを行うと高温、多湿になり病害等が発生する恐れがありますので、夜間は開放してください。

親株育成用母株は品種本来の特性を備え、ウイルス病、センチュウ等の病害虫におかされていない健全な株を選定しましょう。

◆夏秋ギク

７月出荷作型の挿し芽を上旬から行います。挿し穂は無病で充実した揃いの良いものを晴天の午後に採穂します。「フローラル優香」は系統によって特性が異なりますので、系統をしっかり把握し栽培管理を行ってください。「フローラル優香」は消灯前後を問わず生育期間全般での低温が貫生花の発生を助長しますので、電照期間中から気温を確保するように努めましょう。

◆スイートピー

２月中下旬の天候不順や低温によって草勢が不安定になっているほ場が見られます。適切な肥培管理で草勢の安定化を図りましょう。液肥の施用に当たっては、根を傷めないように高濃度の液肥の使用は避けましょう。

３月に入ると気温が不安定な日が増えてきますので、細やかな温度管理に努めるとともに、花弁の花しみや灰色かび病の発生を低減するため、十分な換気や、微生物農薬の使用、除湿のための送風を行いましょう。日射が強くなり、気温も上がってきますので、ステムの長さが短くならないように、今までよりもかん水間隔を短くし、１回のかん水量も増やしましょう。

下旬から採種の交配期になります。採種を行う株は必ずつる下げを行い、かん水は控えめにしてください。

◆デルフィニウム

沿海地域では３番花、中山間地地域では２番花の出荷時期になります。気温が上昇してきますので、軟弱にならないよう昼間の換気は十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等を行いましょう。

◆ホオズキ

８月出荷作型の植え付け期になります。萌芽時の生長点の焼けを防ぐため、マルチの穴あけは適期に行いましょう。気温が上昇しハウス内への害虫の侵入も多くなりますので、防虫ネットの設置やほ場周辺の防除に努めましょう。

◆シキミ

春苗の定植時期になりますので、育苗床から掘り上げた苗は乾燥しないように管理し、できるだけ早く定植してください。また、剪定時期にもなりますので、樹勢を維持しながら品質の高い切り枝生産が出来る樹形を作り上げましょう。

（中村　広）

畜産

◆家畜

春先のこの時期は周期的に気温の変化を繰り返し、家畜が温度差によるストレスを多く受ける時でもあります。昼間は暖かくなる日が多くなりますが、朝、晩は急激に温度が下がることもあります。子牛、子豚などの幼畜に対する防寒対策は引き続き徹底しましょう。哺乳子牛の適温域（好ましい気温）は１３～１５度で、気温が５度以下になると発育等に影響が出てくると言われています。牛舎内に子牛の高さにあわせた温度計を設置し、子牛の健康状態をみながら保温対策をこまめに行いましょう。また日中の気温の高い時間帯には、牛舎の換気を行うとともに、母牛と一緒に運動場で日光浴をさせるようにしましょう。

◆飼料作物

イタリアンライグラスは気温の上昇とともに生育旺盛となり、急速に伸び始めます。出穂も見られ青刈りでの給与も増えてきます。未熟堆肥や窒素質肥料を多く施用したほ場で生産された青刈りのイタリアンライグラス等では硝酸態窒素による中毒が懸念されます。近くの農業改良普及センターで硝酸態窒素の含有量を調べることができます。特に葉色が濃い場合は、牛に給与する前に硝酸態窒素の量を調べ、適正な給与量について指導を受けましょう。また、今月末からトウモロコシ等の春夏飼料作物の作付けが始まります。事前に土壌診断を行い、適切な施肥ができるようにしましょう。

◆家畜防疫

毎月２０日は「県内一斉消毒の日」です。３月に入っても「鳥インフルエンザ」の発生については注意しなければなりません。伝染病の侵入から農場を守るために、畜舎内の消毒、踏み込み消毒槽の設置、畜舎周辺の石灰散布などの衛生管理を徹底しましょう。

（小坂昭三）

特用作物

◆茶

１　春整枝

整枝は、２月下旬～３月上旬の平均気温１０度を目安に実施します。葉層確保（８㌢以上）を前提に越冬芽の被害程度を考慮し、最終摘採面から３～５㌢を目安に整枝深さの調整が必要です。なお、整枝直後に最低気温が氷点下の低温に遭遇しないよう天気予報等に注意します。

２　春肥の施用

早い所で２月から始まり、２回目や遅場地帯では、３月上旬・中旬頃までに施用しておきましょう。萌芽前後の芽出し肥は、摘採２０～２５日前までに硫安等の速効性肥料を施用します。

施用量は、地域の施肥基準に準じたものとし、畝間に幅広く散布し、流亡防止と分解促進のため、軽く撹拌します。

３　防霜対策とカンザワハダニ防除

桜の開花予想から平年並みの芽の動きが予想されますが、近年、気温の較差が大きく整枝前後の晩霜害が心配されます。防霜ファンは、秋整枝園では萌芽１５日前から、春整枝園は整枝直後から稼働させます。設定温度は、萌芽前後までは摘採面温度を３度、その後、１～２葉期までは５度、２葉期以降は７度にします。　整枝後のダニ防除は葉裏に充分かかるよう実施しましょう。

４　定植

茶の定植は露地育苗の苗では２月下旬～３月中旬ですが、施設内で育苗した苗は、外気で１週間程ならし、定植後の

極端な低温を避けるため、一番茶前の４月定植が良いでしょう。定植の際はペーパーポットの上部が植穴より上に出ないよう注意します。

（岩切健二）

◆しいたけ

１　採取

５～７分開きの時期に傘の縁が巻き込んだ状態で、形状・色沢とも良好なものを採取します。

雨子（あまこ）での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になりますので、なるべく晴天を選んで日和子（ひよりこ）で採取しましょう。また、ほだ木の表面を傷めないように、しかもヒダに触れないように丁寧に採取しましょう。

さらに、容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取したら、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぎましょう。特に雨子（あまこ）は素早く処理しましょう。

２　乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げましょう。

３　収量アップ

防風ネットの設置や古ほだ木への給水を行い、収量アップに努めましょう。

（田中　貴司）

◆葉たばこ

今月は、本畑作業の第一歩となる植付けが主な作業となります。品質・収量の安定化に向けて良いスタートをきりましょう。

１　植付ける苗は、着葉数が９～１０枚（子葉～米粒大まで）のもので行ないましょう。

生育を揃えるために、植付け穴の深さは１３～１５㌢に揃えましょう。植付け穴が浅過ぎたり、深過ぎた場合、肥料吸収がうまく行なえず、初期成育が遅れ、不揃いの要因と

なります。

また、抱土に土が被さっていない場合、抱土が乾燥し、根が伸張できずに初期成育が遅れ、不揃いの要因となりますので、植付け後は、抱土まで土が被っているかを確認しましょう。

生育不良・病害対策として、排水溝の完備を徹底しましょう。

植付け後は、植付け穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収しましょう。

２　たばこ黄斑えそ病が、懸念される場合は、防虫ネットの設置や共同防除に向けた話し合いを行い、黄斑えそ病の発生防止に努めましょう。

（中矢　恭輔）

内容の詳細について

３月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
(http://mawi.sakura.ne.jp/)

なになに農業アラカルト

施設野菜・花きの病害虫対策

まだ寒さが続いていますが、日長はだんだん長くなってきました。もうすぐ春になるこの時期は病害の発生に特に注意が必要です。

これから先は夜の気温が上がってきますから、野菜等を栽培する施設の暖房設定温度によっては、暖房機が作動しない日が出てきます。閉めきった施設で暖房機が作動しないか、作動したとしても短い時間であれば、施設内は湿度が高い時間が長くなり、病害の発生に適した環境になります。

近年、燃油高騰対策として、栽培施設を多層・多重に被覆して保温対策を行っています。そのため、以前であれば暖房機が作動していたような気温でも作動しなくなり、施設の内部が乾きません。

また、季節の変わり目には連続して雨が降りますが、３月は「菜種梅雨」の時期に当たります。週間天気予報等に注意し、自分の栽培施設が病害の発生に好適な環境にならないよう適切な予防を行うことが必要です。また、暖房機の４段サーモやモヤ取り機能、送風タイマー、循環扇などを活用して湿った空気が滞留しないように定期的に送風することは、病害対策として有効です。

一方、暦の上で「冬眠をしていた虫が穴から出てくるころ」を意味する啓蟄（けいちつ）は、今年は３月５日です。宮崎市の平年の平均気温は１０度を超え、多くの害虫が野外でも成育できる温度になります。また、毎年３月中旬には最高気温が２０度を超える日が時々あり、その日には害虫類が飛翔し施設に侵入してきます。３月中旬までには（沿海部はひな祭りごろには）、施設の周囲にある雑草をできるだけ処分して、害虫類が施設に侵入してこないようにすることが重要です。

３月は、気候の変化に伴って病害・虫害ともに大きく変化します。４月以降の品質と収量を確保するために、気象情報に注意し、送風装置等の活用や周辺雑草の処分など、利用できる手段を駆使して病害虫対策を行いましょう。

栽培施設内の病害対策として有効な循環扇

（黒木修一）

向こう１か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発　生　状　況　と　防　除　対　策
早期水稲	ｽｸﾐﾘﾝｺﾞｶﾞｲ	やや少	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。 また、用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にはネットを設置します。
施設野菜類	病害全般	―	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、今後は夜温も高めに推移することから、加温機が稼働しない日は施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病 黄化えそ病 （MYSV） ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類	やや少 やや少 並 やや多 － 並 並	いずれの病害も多発すると防除効果が上がりにくいので予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	－	ウイルス病を媒介するアザミウマ類、コナジラミ類などの微小害虫に対しては、抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に粒剤を施用し、害虫類の防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 やや多 前年、前々年と同程度	斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。 また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。
	アザミウマ類 ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類	並 前年より多い	今後暖かくなるにつれて、増加するおそれがありますので、発生の多いところでは７日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 黄化葉巻病 （TYLCV） ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類	並 多 前年と同程度 並	灰色かび病の発生が多く、注意報を発表しています。いずれの病害も多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。 トマト黄化葉巻病は、発病株の早期発見・除去に努めるとともに、媒介虫であるタバココナジラミ類の防除も徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病 ハダニ類 アブラムシ類	やや少 やや多 並 やや少	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうちに定期的な防除を行います。 また、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統の薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーションで散布します。
カンキツ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 並 やや多	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 ミカンハダニは発生面積率が高い状況です。生育密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季（3月上中旬、萌芽前）にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するようていねいに防除します。

１）「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
２）病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jppn.ne.jp/miyazaki　です。